

Pierre Bayle にかんする若干の研究について

——残された研究課題の検討——

渡 辺 恭 彦

I

本稿は、筆者自身の Pierre Bayle についての研究でも、これまでの Pierre Bayle にかんするすべての研究について詳細な研究史的・位置づけを試みたものでもない。本稿はこれまでに目を通すことができた若干の Pierre Bayle にかんする研究書についてそれらの問題関心の在り方や研究方法を検討しようとしたもので、今後の筆者の Pierre Bayle 研究のための1つのメモにすぎない。

さて、筆者の考えでは、従来のヨーロッパの思想家あるいは研究者における Pierre Bayle のとらえ方は、研究主体の問題意識の点からみて次の2つの種類に大別できるように思われる。

第1は、Pierre Bayle がその思想と実践とによって同時代および後世に与えた影響の点から彼の功績を評価しようとするそれ自体きわめて実践的な意図をもった歴史的評価の試みであり、第2は、Pierre Bayle の思想それ自体の構造や立場や系譜をできるかぎり客観的に究明しようとするいわば思想内在的なアカデミックな実証的分析的研究である。

第1の試みは主として、Bayle を16世紀の humanistes の後継者、17世紀の libertins の同志としてとらえ、さらに18世紀の philosophes libéralistes の先駆者・思想的源泉として位置づけようとする

試みであり、この試みにおいては Bayle の homme de raison としての実践的・批判的側面が強調され、とくにその scepticisme の歴史的意義が重視される。従ってこれらの試みには、Bayle を取扱う思想家あるいは研究者自身の実践的立場が強く投映されており Bayle に対する深い共感と敬意がうかがわれる。これに対して第2の試みは、(a) rationaliste としての Bayle の思想構造と思想系譜を解明しようとするものと、(b) Bayle をどこまでも1人の religionnaire としてすなわち calvinisme の立場に立つ homme de foi としてとらえ、彼の多面的な思想を calvinisme を中核として明らかにしようとするものに分けることができる。以下これらの評価・研究の諸方向にみられる若干の著作について検討し、併せて今後の Pierre Bayle 研究の課題を考えてみたい。

II

上述の第1の試みは、既に18世紀において Montesquieu や Voltaire をはじめとして啓蒙思想家たちによって行なわれた。彼らは、Bayle の批判精神や懐疑主義的態度を自己の模範とし武器として史実を批判し教会や聖書を批判した。殊に Voltaire は、早くから Bayle の著作集を座右の書として「哲学書簡」(1734)等その著作のあらゆる箇所¹⁾に Bayle

¹⁾ cf. *Traité de métaphysique* (1734?), *Discours en vers sur l'homme* (1740), *Poème sur le désastre de Lisbonne* (1756), *Entretien d'Ariste et d'Acrotal* (1761), *Idées républicaines par*

を引き出している。一般に18世紀の啓蒙思想家たちにとっては、Bayleの著作は、虚偽と不寛容と圧政と闘い、真理と寛容と権威に対する自主独立の主張とを行なうための《兵器廠》であった¹⁾。彼らはBayleの姿勢と方法を自らの啓蒙主義的な思想と行動の指針とし模範として利用した。それだけに彼らにはBayleの内面の精神活動を深く追体験したり思想構造を分析したりあるいはBayleの思想と行動の歴史的意義を客観的に考察するという態度には欠けるところがあった。彼らは研究者としてよりも思想家としてまた実践家としてBayleに共鳴したのである。

このようなBayleの把握方法は19世紀のFeuerbach²⁾やMarxにもうかがわれる。Marxは、《17世紀の形而上学とあらゆる形而上学の信用を理論的におとした》Bayleの《懐疑論》を高く評価し、Bayleの懐疑主義的著作のなかに反形而上学的・反神学的姿勢ばかりでなく無神論的・唯物論的社会的の予言をも見出すとした³⁾。哲学を単に解釈することよりも新しい社会創造の原理となりうるような新たな哲学を創り出すことを意図したMarxは、Bayleもまたそのような役割を担った一人としてフラン

ス唯物論および無神論の成立過程のなかに位置づけようとしたのである。この試みのなかには、思想家・革命家としてのMarxの熱烈な情熱と学者としての透徹した論理が渾然と融合しているのを見ることが出来る。

近年のLaskiやBuryの研究⁴⁾も多分にごうした問題意識を継承したものと見える。しかし彼らの場合にはフランスにおける無神論および唯物論の成立過程というよりはむしろヨーロッパにおける自由主義思想・解放思想の歴史のなかに位置づけようとするものであった。すなわち彼らは、Bayleの懐疑主義的・批判的哲学をDescartesの合理主義的懐疑哲学と同一のものともみなすとともに、Bayleの《寛容》の主張がヨーロッパの自由主義と民主主義の進展に貢献したその歴史的意義を積極的に評価したのである。

次に前述の第2の試みの(α)に属する比較的正確を得た研究を挙げるとすれば、Delvolvé, Hazard, Spinkらの研究⁵⁾であろう。

DelvolvéはBayleの独創性を彼が神学・宗教・道徳・哲学等の問題に適用した《方法》としての《批判》(critique)のうちに見、その《批判》の内容・

un membre d'un corps (1762?), Traité sur la tolérance à l'occasion de la mort de Jean Calas (1763), Petit commentaire sur l'éloge du Dauphin de France composé par M. Thomas (1766), Le philosophe ignorant (1766), Lettres à S. A. Mgr le Prince de... sur Rabelais et sur d'autres accusés d'avoir mal parlé de la religion chrétienne (1767), etc. dans Voltaire. Melanges, Bibliothèque de la Pléiade, 1961.

- ¹⁾ Daniel Mornet, *Les origines intellectuelles de la Révolution française (1715~1787)*, 5^{ed.}, 1954, p. 106.
- ²⁾ Ludwig Feuerbach, *Pierre Bayle, Ein Beitrag zur Geschichte der philosophie und menschheit*, 1838.
- ³⁾ Marx und Engels, *Die heilige Familie*, 1844. 大月書店訳2巻, 132~133 ページ.
- ⁴⁾ H. J. Laski, *The Rise of European Liberalism. An Essay in Interpretation*, 2nd. imp., 1947, pp. 98, 124, 139~140. J. B. Bury, *A History of Freedom of Thought*, 2nd. ed., 1952, pp. 84, 107~108. 121.
- ⁵⁾ Jean Delvolvé, *Essai sur Pierre Bayle. Religion, critique et philosophie positive chez Pierre Bayle*, Paris, 1906. Paul Hazard, *La Crise de la conscience européenne (1680~1715)*, Editions contemporaines, Paris, 1955. J. S. Spink, *French Free-Thought. From Gassendi to Voltaire*, University of London, 1960.

性格・効果等を Bayle の諸作品の詳細な研究によって明らかにしようとしている。Delvolvé は、Bayle の《批判》の根底にあったものは確実な《事実》(faits)に対する実証主義的関心に他ならなかったと考え¹⁾、実証主義者として Bayle を特徴づけ、その点において cartésiens, Montesquieu, さらに 19 世紀の実証主義者たちとの近似性を見出している²⁾。また Delvolvé は、Bayle と Gassendi, Locke, Leibniz, Kant らとの間に経験主義者としての思想的近親性を指摘している³⁾が、しかし Bayle の批判的方法が何故《歴史的》でなければならなかったのか、Bayle にとって《歴史的》とは何を意味していたのか、については十分な検討を加えていない。

さて、Paul Hazard が 1935 年の「ヨーロッパ人の意識の変動」のなかで明らかにしようとしたことは、17 世紀の後半(1680 年頃)から 18 世紀の初頭(1715 年頃)にかけての 35 年間にヨーロッパ人の意識のなかに、すなわちヨーロッパ人の人間観・社会観・世界観および自然観のなかにいかに著しい変動が生じたかということであった。Hazard はこの時期を、地理上の諸発見による世界の拡大、印刷術の普及、ルネッサンスの humanism の精神の滲透、新しい科学精神の普及等によってキリスト教的思惟方法にとって代る反キリスト教的思惟方法が現われ、大多数の人間が無視された不平等な絶対主義的秩序をすべての人間が解放された平等な社会に変革しようとする考えが立現われた時期、すなわち《合理的な考えの人々》と《宗教に固執する人々》の相剋の時期、《理性はもはや均衡のとれた知恵ではなく大

胆な批判者》となり《人間のみが万物の尺度》となって《人間にとって人間自身がその存在理由となり目的となった》時期として特徴づけているのであるが、彼はこの《静から動へ》のヨーロッパ人の意識の一大変革の一翼を担った幾多の《精神的英雄》の 1 人として Bayle を取り上げ、彼が《宗教を離れて純粹の懐疑主義に近い立場に至ったその思想の諸段階》⁴⁾を明らかにしようとするのである。以下 Hazard の所論を暫く追ってみよう。

プロテスタントの家系に生れた Bayle は、1669 年 3 月《宗教論争にかんする幾つかの書を読んで》カトリックに改宗し、しばらく Toulouse のイエズス会の collège で教育を受け哲学を学んだがそこで教育に失望し《丁度極に住んでいる人間が再び太陽を見たときの喜び》をもって 1670 年 8 月再び《改革派の教会》に戻った《道草》の過程を経て、1670 年 Genève 到着後は一步を進めてアリストテレスからデカルトに至り《明晰な思想と合理的明証の弟子》となった。Paris, Sédan 時代(1675~1681)、Bayle は飽くことなき《知識欲》(libido sciendi)に駆られて《すべてを批判するためにあらゆるものを読みあらゆるものを知》ろうとした。そして Journal des savants を中心として彗星の出現をめぐる迷信的な予言の打破に活躍した。Rotterdam 時代(1681 年以降)、Bayle は第一級のプロテスタントとして一方で Maimbourg 神父を論駁しカトリック教会およびカトリック派の人間の《力による改宗を》破廉恥な行為として非難し、他方であまりにも熱狂的なプロテスタントであった Jurieu に対しても批判を

¹⁾ 《Bayle は、物理学におけると同様歴史および道徳のすべての領域において事実の確実な認識に達することは可能であると考えていた。彼をこの認識に導き、それまで宗教的ドグマと先験的推理の固有の領域に属していた諸問題に対して独創的な解決を与えることを可能にしたのは、批判であった。》Delvolvé, op. cit. p. 422.

²⁾ Delvolvé, op. cit. pp. 427, 429, 431.

³⁾ Delvolvé, pp. 427, 430.

⁴⁾ Hazard, op. cit. p. 101.

加えることによって両派に対して良心の自由と寛容を要求し、ついにはカトリック側からは無神論者として、また Jurieu からはソツィーニ派の自由神学の徒として非難されるに至った。この時の Bayle の立場は《自然の光による明析にして判明なる観念》を論拠とする cartésien の立場に他ならなかった。しかし Bayle は一面ではこうした理性の力を信じ頼りながらも他の面では真理把握の困難さと人間精神の弱さを悟ることによって次第に phyrhronisme に傾いていった。この Bayle の phyrhronisme の帰結は、要するに宗教と哲学との間には何ら共通の尺度はなく、宗教は理性と両立しない神秘であり、考える精神の機能や在り方そのものとは両立しない一つの精神状態であることを認めることであった。しかし Bayle は絶対の懐疑主義に至ってそこに安住することはできなかつた。それは彼があまりにも humaniste であったからである。Hazard はこの点につき次のようにのべている。

《では Bayle は絶対の懐疑主義にまで行きついたであろうか。もし彼が自己の精神の自然の性情に従っていたらそこまで行ったであろう。…もし彼が完全に論理的であったら、またもし彼が自分の人間的経験の結果と日毎に彼の精神に強くなるしかかっていた結論だけから判断していたら、彼はもはや行動する理由も存在する理由もない広大な空漠たる世界へ行ってしまったであろう。彼は Le Clerc が形而上学的懐疑主義とよんだ全面的懐疑にまで行くことができたであろうし、また行ったに相違なかつた。

だが彼はその誘惑に耐えた。彼の勇敢さと自分の果すべき使命についての考え、真理に対しても

ち得た疑い以上にさらに強い誤謬に対する憎悪、失敗を断じて許容しなかつた理性、そしてそれら以上に自分の意志についての意識的な努力、こうしたものが彼を最後のドタン場まで行かないようにさせたのである。彼はある道徳的善を完成し、進歩を支援しようという考えを失なうことを望まなかつたのである。》¹⁾

これが、Hazard の Bayle に対する総括的評価である。要するに Hazard は、Bayle が2度の改宗を経て cartésien に至り同時に謙虚な protestant として論争し真理と寛容とを説くうちに一度は懐疑主義に陥ったが、なお誤謬に対する憎しみ、誤謬の蔓延を防ごうとする努力、自分は少なくとも他人の目を開く義務をもった盲人のための医者であるとの使命感によって絶対の懐疑主義から救われ最後まで戦闘的で18世紀の人間となり得たその点に、すなわち humanisme を基底とした rationalisme と scepticisme の融合に Bayle の特色を見出そうとしているのである²⁾。

第3の Spink の研究は、《Gassendi が物を書き始めた時から Voltaire が円熟に達した時に至るまでのフランス自由思想の流れをたどる》ことを目的としたもので、啓蒙主義出現以前のフランス自由思想は、外国からの刺激に頼り切ることなく《フランス自身の内的本性》に従ってその姿を変えてきたという問題設定の上に立ち、かような問題設定にもとづいて Gassendi を中心とするフランス・リベルタンの《フランス本来の懐疑主義がエピクロスの経験主義とデカルト的合理主義に基礎を与え》、《世紀の終り頃までにこれら3つの要素が融合して Pierre Bayle および Fontenelle の合理主義的懐疑主義

¹⁾ Hazard, op. cit. pp. 115~116.

²⁾ cf. Hazard, *La Pensée européenne au XVIII^e siècle*, 1946, ここでは反教権的 libéralisme の進展に貢献したイギリスおよびフランスの déistes への Bayle の合理的懐疑主義の影響を示している。1^{ère} partie, chap. III.

(rational scepticism) を形成するに至った》こと、そしてさらにその合理主義的懐疑主義が Voltaire の「哲学書簡」においてイギリス自由思想と合流して啓蒙主義として結実するに至る過程を明らかにしようとする¹⁾。かくて Spink は、Pierre Bayle についてはもっぱらフランス・リベルタンの懐疑主義を継承するデカルト的合理主義者としてとらえるとともに、Bayle の行なった幾多の思想家に対する批判の歴史的意味を検討する。

まず Spink は、靈魂の不滅性と非物質性を唱えるスコラ哲学に対して、また靈肉二元論を唱えるデカルト派の哲学者に対して、さらにまた靈肉の分離独立と神による調和を唱く Leibniz に対して、Bayle は《常識》の立場からまたその合理主義的懐疑主義の立場から批判を加えたが、自らはこの問題に対しては敢て積極的な解答を与えなかったことを指摘する²⁾。さらに Spink は Bayle の Spinoza 批判に触れ、彼が Spinoza を批判したのは、信仰と理性とを峻別し理性の力を超越した全く別の次元に神の存在を認める Bayle にとっては、Spinoza の汎神論は結局は神即物質という一種の無神論であり、

Spinoza は無神論者に他ならないと思えたからであるが、実はそのような Spinoza の理解は、Bayle ばかりでなくフランスの cartesian rationalists のすべてが陥った誤解であって、Spinoza の宗教的合理主義がフランスの風土に根をおろすことができなかつたのはまさにこの誤解のためであった、とのべている³⁾。しかし Spink は、Bayle の批判の根拠となつたという合理主義的懐疑主義の内容と構造については具体的に明らかにしていない。

さて Pierre Bayle を徹底した《信仰の人》とみなし、calvinisme の伝統のなかに位置づけようとする試みの代表的なものは、Sainte-Beuve と Dibon のそれであろう⁴⁾。

Sainte-Beuve は 1935 年の Portraits littéraires のなかで次のように述べている。

《Bayle が信仰の人であったその方法は彼が同時にもっていた批判的才能と見事に一致している。Bayle は信仰に生きた人であったとわれわれは考える。しかもわれわれはこの結論を、Bayle が年に 4 回聖体拝受を行ったり公けの礼拝や説教に行ったりしたということからよりはむしろ、彼がそ

¹⁾ Spink, op. cit. pp. v~vi.

²⁾ Spink, op. cit. pp. 230~234.

³⁾ Spink, op. cit. pp. 262~265. 同時に Spink は、Bayle は寛容の問題については、Vanini や Spinoza のような無神論者も《有徳》でありうることを示すことによってドグマに固執し不寛容を唱える連中を批判して地下に潜っていた反教會的秘文書家たちからその頭目とみなされるに至った状況を緻密な分析によって示している。op. cit. pp. 283~285.

⁴⁾ 同じ試みはオランダの女流研究家 Cornelia Serrurier によっても行なわれている。彼女は 1912 年の *Pierre Bayle en Hollande* のなかで Bayle の思想における宗教的側面の重要性を指摘し、Bayle をオランダの protestantisme の伝統のなかにおいて考察しようとした。《私は Bayle を信仰者のなかに入れてはじめて彼の思想のなかに少しの論理と統一性を見出すことができる。私の目には Bayle は冷静ではあるが誠実な 1 人の calviniste として映ずる。》と彼女はのべている。cité de Dibon, p. xii. イギリスの研究家 W. H. Barber もこの Serrurier の考えを踏襲し発展させようとしている。Barber は、その本質を悪とみる Bayle の人間本性的観念、人間の情念の反映とみるその歴史観、宗教的信仰は理性の働きからではなく、神による神秘的な照明であるとする考え、これらのうちに信仰絶対論的な calviniste の思想を見、その点で André Gide の精神的先駆者となつた、とのべている。'Pierre Bayle : Faith and Reason'. The French Mind. Studies in Honour of Gustave Rudler, Oxford, 1952, pp. 109~125.

の書簡のなかで示した多くの諦めの感情と神に対する信頼の感情から引き出すことができるのである。…彼が自分の失職について語っている手紙の多くは、穏健な調子を示しているが、それは単に性格の静けさや穏健な哲学ばかりにではなく、深く根ざした服従の精神とキリスト教の真の精神ともとづいているようにみえるのである。》¹⁾

Dibon はこの Sainte-Beuve の見解を Bayle 研究の《鉄則》となるべきものだとし賛意をよせているが、その Dibon は、Bayle 死没 250 年を記念して刊行された論文集の冒頭の「Bayle の再発見」と題する論文のなかで、Bayle を懐疑主義者とみ、あるいは Voltaire とみる《神話》を非難し、また Bayle を単に時代と環境の純粋観客としてしかみない見方をも斥けて、彼は scepticisme にではなく、calvinisme の立場に立った《独立不羈の客観的報道者》であった。と次のように述べている。

《Grotius に続いて彼に自由な道徳の観念を培い、情念にもてあそばれる人間本性について pessimism を抱かせたのは恐らく calvinisme であった。彼の信仰を充分に理解したならば彼の行なった激しい批判も驚ろくに当らない。彼の信仰は、彼が思惟の確実性と首尾一貫性とに対するデカルト的要求を徹底的に主張したこととも決して矛盾してはいない。しかし偏見と謬見に対する彼の批判がデカルト的方法にのみもとづいていたと考えてはならない。それは la Mothe や Naudé のような libertins によって継承された Erasme や Montaigne の伝統に負っていたのである。Bayle もまた彼らを読んでいたのである。しかし Bayle の

批判は、とりわけ 17 世紀の科学思想の潮流に、とくに Spinoza と Richard Simond において頂点に達した始源へ帰れという要求 (besoin de retour aux sources) に負うていた。Bayle は彼らの後を受けて聖書と教義の歴史家として時代の先端に立っていた。すなわち聖書解釈から神秘をはぎとる仕事は彼にとっては知的・道徳的誠実さの 1 つの現われに他ならなかったのである。》²⁾

III

以上は数人の人々の Bayle 研究の視点と主張とについて簡単な整理を行なったものである。各研究それぞれに suggestive であるが、筆者はこれらの研究を読んでみてなお Bayle 研究には次のような課題が残されているように思った。

その第 1 は、やはり Bayle の《歴史的・批判的》方法の意味と性格をさらに充分に明らかにすることであろう。

Bayle の批判的方法の基盤は、たしかに Delvolvé のいうように cartésianisme にもとづく実証的精神であったであろうが、しかしそれは事実を措定して客観的な学問体系を構築するための純粋に客観主義的・論理主義的な実証主義ではなかったであろう。とくに Bayle の批判が何故《歴史的》批判でなければならなかったかという点を考えてみるならば、それは単に源泉に遡って過去の事実を考証し新たな事実を発掘するというだけでなく、過去に照らして現在を批判するという多分に実際的な課題を担うものであったことが知られるであろう³⁾。それ故 Delvolvé のいう《実証主義》も、Bayle がかの歴大

¹⁾ Du Génie critique et de Bayle, cité de Dibon, pp. xiii~xiv.

²⁾ Paul Dibon, 'Redécouverte de Bayle' dans Pierre Bayle. Le Philosophe de Rotterdam, Paris, 1959, p. xvi. なお, Marcel Raymond も, Bayle の思想の根底に *l'Apologie de Raymond Sebond* における Montaigne, *l'Éloge de la folie* における Erasme を継承する humanisme を認めているが, しかし Bayle は彼らに比べて《humaniste impur》であったと述べている。Marcel Raymond, *Pierre Bayle. Choix de textes et Introduction*, Paris, 1948, p. 13.

な神学・形而上学批判を《歴史的》批判とよんだその意図との関連で、すなわち Bayle の歴史意識ないしは現実意識との関連で検討しなければその本当の意味と性格を知ることではできないであろう。換言すれば、Bayle の批判的方法を単なる実証主義的方法としてではなく、過去と現在の認識および克服の方法として再検討しなければならぬように思うのである。

第2に問題となるのは、Bayle の《懐疑主義》とよばれるものの実体であろう。

Hazard も Spink も Bayle の懐疑主義に触れてはいるが、いずれもその実体については明らかにしていない。すなわち肝心なのは、この懐疑主義の思想的系譜の関係よりも、それが Bayle の場合どのような人間観、社会観あるいは歴史観によって形成されたのかということであり、その懐疑主義は内容と構造の点で Montaigne や Pascal らの場合とどう異なっていたかということである。Montaigne の場合にも Pascal の場合にもまた Bayle の場合にもその懐疑主義の根底には人間の本性と社会の現実とさらには歴史の経過とに対する pessimistic な見方が横たわっていた²⁾。そしてそれは Montaigne の場合には catholicisme の信仰と、Pascal の場合には jansénisme の信仰と、さらに Bayle の場合にも calvinisme の信仰と密接に結びついていた。しかし Bayle の場合、Hazard のいう如く、絶対の懐疑主義にも信仰絶対論にも走ることなく、humanisme の伝統をテコとしてなお人間に信頼をよせ社会に向けては寛容を説き人々の蒙を開こうと真理の普及のために闘った³⁾。とすれば、Bayle の懐疑主義とはいかなるものであったか、それと calvinisme の信

仰と humanisme とはどのように関連し合っていたのかが改めて問われねばならないであろう。

第3に Bayle の思想史的研究において問題になるのはその《寛容》の概念の特徴とその生成発展の過程であろう。

Bayle の寛容論は、Locke にみられるような基本的市民権としての良心の自由の主張でも、理神論者たちにおけるような近代科学的自然観にもとづく合理的宗教論でもなく、なによりも身をもって体験しなければならなかったプロテスタント迫害の不寛容政策に対する痛烈な抗議であった。そして Bayle はその歴史的批判を聖書と教義の徹底した批判に向けた。そこには真理とは何か、人間の理性の認識力はいかなるものであるかという疑問から発する宗教の多様性と相対性に対する主張がみられる⁴⁾。また、教義や宗派の相違対立によってひき起された政治社会の混乱を苦々しく思いひたすら対立迫害のない静かな政治社会の到来を願う一種の政治的現実主義がみられる⁵⁾。このような意味で、Bayle の寛容の概念内容を明確にし、それが16・7世紀の思想的風土と現実の状況のなかからどのようにして形成され、さらに18世紀の啓蒙思想家たちによってどのような形で受けとられていったかを明らかにすることは、今日でもなお意味を失っていない重要なテーマであろうと思う。

以上これまでの若干の Bayle 研究を通じて今日なお残されていると思われる研究課題を考えてみたわけであるが、それは要するに、多面的な構造をもった Bayle の思想を一面に限定することなく統一的に把握し、Bayle という魅力ある人間の全体像をできる限りリアルに構成してみたいと考えたからである。

¹⁾ しかし Bayle の場合、逆に現在変革のための規範や理想像を過去や未来に求めるという積極的思考があったかどうかは問題であろう。 ²⁾ voir Marcel Raymond, op. cit. pp. 151~175.

³⁾ A. Prat, *Pierre Bayle. Pensées diverses sur la comète*. Edition critique avec une introduction et notes, Paris, 1939, 2 tomes. voir Introduction.

⁴⁾ voir Marcel Raymond, op. cit., pp. 95~119. ⁵⁾ do, pp. 207~219.